

2009 年度
非文字資料研究センター 第4回公開研究会

EBIKI

—日本文化研究資料としての「絵引」—

日時：2009年12月5日（土）13：30～17：00

会場：神奈川大学 横浜キャンパス 17号館 215会議室

趣旨説明・問題提起：ジョン・ボチャラリ

司会進行

(非文字資料研究センター 研究員 /
東京大学大学院総合文化研究科 教授)

報告者：中井真木

(非文字資料研究センター 研究協力者 /
東京大学大学院総合文化研究科 博士課程)

アレクサンドル・マンジャン (非文字資料研究センター 研究協力者 /
立教大学ランゲージセンター 教育講師)

君康道 (非文字資料研究センター 研究協力者 /
東京大学大学院総合文化研究科 専任講師)

コメンテーター：韓東洙

(韓国 漢陽大学校建築学部 教授)
(通訳：徐東千 東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻)

福田アジオ (非文字資料研究センター センター長)

質疑・討論・総括 司会進行：ジョン・ボチャラリ



趣旨説明・問題提起

ジョン・ボチャラリ

『絵巻物による日本常民生活絵引』は日本民俗学研究成果の一つである。この『絵引』の本文とキャプションを英訳し、さらにキャプションについては中国語、韓国語そしてフランス語に訳し、マルチ言語版として刊行することで、世界の人々に日本の民俗社会の豊かさを理解してもらい、また学際的研究に参考にしてもらうことは、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第 1 班「図像資料の体系化と情報発信」の狙い所であった。

『絵引』が「EBIKI」になったところで、日本文化研究資料としてどう見えてくるか、その外国語での資料を仕上げるにはどういう問題点があるかを中心に考えていくのは本公開研究会の目的であった。

その経緯などを簡単に紹介すると：

—神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」について

上記の「第 1 班」の他に、第 2 班「身体技法および感性の資料化と体系化」、第 3 班「環境と景観の資料化と体系化」、第 4 班「地域統合情報発信」、第 5 班「実験展示」、第 6 班「理論総括研究」の各分野に編成され、5 年間にわたり研究事業を推進してきた。COE プログラム終了後、引き続き神奈川大学の「非文字資料研究センター」として研究を進めてきた。

—『絵巻物による日本常民生活絵引』はどのような資料か

平安・鎌倉時代の代表的絵巻物を美術品としてではなく、一般の人々の生活を描いた資料としてとらえ直し、絵に描かれた事物にキャプションをつけることによって図像資料を「引く」ように配慮された研究書である。日本常民文化研究所が編纂したもので、全 5 巻で構成される。

——編纂者から見た「Pictopedia」

そもそも英語にないもの、例えば日本家屋の建築用語、服装の名称など、をどうやって海外読者に理解しやすいよう訳すかの悩み。また、現在の学問では認めがたい当時の研究水準に制約された解説はどうするかという悩みがあった。

——教育現場の視点

留学生向けの授業で利用してみたところ、その新鮮な驚きはこれからの EBIKI の活用に期待感を与えてくれる。



上衣・袖細・直垂
—絵引の「名付け」をめぐる—

中井 真木

本研究会主催者から報告者には、マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の問題点と活用法について意見を述べるのが求められた。正直なところ、原著にせよマルチ言語版にせよ、『絵引』について問題点を連ねるのは容易だ。模写時の省略や執筆当時の研究環境等に起因する絵画・文献解釈の誤り、時として難解な解説文、同じものに複数の語が、複数のものに同じ語が当てられている索引、他言語に対応する語のない場合の翻訳の処理、誤訳、複数言語間および翻訳者間の訳のばらつき等々（君康道「「四脚」?「背の白い黒牛」??: オリジナル版『絵引』における「間違い」とマルチ言語版の編纂」『非文字資料研究』23号、2010年1月参照のこと）。もちろん、絵巻から場面を切り取り、そこに見える事物に番号を振って名称を与え、索引化するという『絵引』の発想は極めて刺激的で、『絵引』は絵画を史料として利用する上で必ず言及される存在だ。だが、上のような問題点のために『絵引』をそのまま研究に活用することは難しい。研究会の報告でも、またフロアからも、こういった問題点の指摘や改善を求める声が多く出された。

しかし、このような問題点が『絵引』の価値を完全に損ねているとは思わない。たしかに、絵から言葉を引き、言葉から絵を引く工具としては不足かもしれない。が、眺めて発想を得る導きとしての『絵引』の魅力は失せていない。『絵引』にはさまざまな絵巻物類が取り上げられているが、それら絵巻物を片端から眺めることは、写真複製の入手が容易となった今でも骨の折れることであ

るし、そうしたからといって『絵引』で取り上げられている事物すべてに自力で気付けるわけでもない。もともと『絵引』には読み物としての工夫が見られ、『絵引』を読むことで、絵画に表現された中世の生活文化を全体的に理解し、同時に代表的な絵巻物に馴染むことが可能だ。マルチ言語版の刊行によって、日本以外の文化や絵画に造詣の深い研究者による『絵引』をきっかけとした新しい発見も期待できるだろう。このような視点にたち、一つの活用法として『絵引』を日本中世生活文化の入門書として利用することを提案した。

澁澤敬三は1954年の「絵引は作れぬものか」（新版『絵引』第一巻所収）で「これが完成すれば、古代絵巻にあらわれた履物全部を一応楽に眼を通し得るであろう」と展望を述べた。私もそのような資料があればどんなに有用だろうかと思う。しかし、考えてみればそれはデータベースが担うことであって、「字引」の類たる「絵引」の役割ではない。高精細のデジタル画像や電算化されたデータベースが身近である現在、絵引が目指す方向は絵画史料の総索引ではなく、事物の定義と優れた用例を示し、原典にあたる入口を提供する存在ではないか。『絵引』の凡例では「でき得べくんば原典にあたってもらいたい」と注しているが、現代こそ絵引で引き原典で確認する環境が整いつつある。権威ある辞書や事典の多くは最新の研究成果を取り入れるべく版を重ねている。『絵引』も定期的に版を重ねていくことを願う。

このような提言を踏まえて、本報告では『絵引』の有効活用、翻訳、改訂には、物に名称を与える「名付け」の再検討が必要であると考え、その一例として、上衣、袖細、直垂という一見類似する上半身の着衣につけられた名称を検証した。『絵引』総索引にみえる上半身の着衣の名称は五十を越す。登場回数も一回から三百回以上に渡り、形や着用者の性格が比較的明確なものもあれば、定義や使い分けがはっきりしないものもある。例えば、袖細はしばしば簡略な直垂の一種と定義されるが、一方の直垂も元来は庶民の簡素な労働着とされており、『常民生活絵引』の中でこれらを使い分けるとすれば、かなり微妙な分類基準が想定される。加えて、直垂は原典の絵巻と同時代の文献に見えるが、袖細はより後代の語であり、併用してよいのかという問題もある。あるいは既刊の英訳では「上衣」を衣服形式と解釈し、他の衣服と同様に *uwaginu* と音写したが、それでよかったのか。

今回、決定的な結論が導かれたわけではないが、『絵引』で用いられる衣服の名称に「袖」を含む語が多いことか



ら、着用者の性別、階層、僧俗に配慮した上で袖に着目し、袖がないものは袖なし、短かいものは短袖、細いものは袖細、ある程度大きいもので、例えば胸紐が確認できるものは直垂、肌近く着るものは小袖というように分類されているという仮説を述べた。また上衣は、使用箇所共通点が少なく、索引で「し」の項目に置かれ、類語として「下衣」が見えることから、「じょうい」と読み、種類が同定できない衣服に用いた名称と推定した。

これら『絵引』における名付けは、現在から見れば、すべて妥当とは言えない。が、何が妥当かは簡単な問題ではない。民俗学ならではの視点もあり、『絵引』の名付けの一つの学説として尊重した上で、厳しく批判する態度が必要である。

また、名付けの揺れは執筆者達の関心・環境の変転を反映したものであろう。例えば第二巻には「袖細」が出てこない。『一遍聖絵』の衣服の多くが直線的で大きな袖を持つために直垂とされている面もあるが、他巻で袖細とされているようなものは小袖としている。このようなばらつきは担当者の違いとして説明されるべきものかもしれない。河岡武春「『絵巻の会』のこと」(新版『絵引』総索引所収)によれば、「絵に番号を付す作業」は絵巻の会での話し合いと宮本常一の解説を斟酌して河岡が行なったとされており、本文からも解説を参照して索引を作ったこと、解説と索引の執筆者間に理解のずれがあることがわかる部分がある。このような情報とあわせて『絵引』の名付けを再検討することで『絵引』の編纂過程を探れば、民俗学や史料論の学史に寄与する点があろう。解説中には、すでに二十世紀前半の日本各地の風俗の証言となっている部分もある。澁澤敬三や宮本常一等が研究の対象となるにつれて、『絵引』そのものを史料として活用していく可能性も出てくるのではないだろうか。



図1



図2

同一図版内における袖細と直垂の使い分けの例(『日本常民生活絵引』第一巻159頁)。

図1の14は直垂、図2の9は袖細とされている。

穿袖の謎 —フランス語圏で絵引をどう使うか—

アレクサンドル・マンジャン



以下で述べる理由から、宮本常一の研究を始点に「日本常民文化研究所」と「非文字資料研究センター」で『絵引』の翻訳を行うことは自然な成り行きであった。私は、フレデリック・ルシーニュ氏とアシスタント原麻子氏と協力し、『日本常民生活絵引』の仏語訳を担当した。

ここでは、『絵引』の内容の分析等ではなく、『絵引』の翻訳という作業そのものについて述べ、そしてフランス語圏における、本翻訳の意味を明らかにしたいと思う。ここでの私の目的は、翻訳の理論を作るのではなく、ただ私たちが経験した困難や問題をありのままに紹介し、そしてその企画をより広い観点から検証することだけである。

一. 翻訳の具体的な点から

まず、例から始めたいと思う。この発表のタイトルに挙げた単語の説明についてである。実を言うと、私たちはタイトル中の単語「穿袖」の読み方が分からない。音読みの「センシュウ」か「センジュ」、それとも訓読みの「うがちそで」か「はきそで」なのか。一体なんと読むのであろうか。索引に読み方は記されていないが、並び順から「うがちそで」だと判断できる。しかし、その索引を作った人は『絵引』を書いた人ではない。

『絵引』の実質的な執筆者は、編集者：澁澤敬三自身というより、アチックミュージアム(屋根裏博物館)のチームであった。そのメンバーの一人、宮本常一が60%程度一大半を執筆したと推測される。宮本常一は碩学であったが、平安時代の全ての専門用語のニュアンスを知っているわけではなかったため、時々「適当な」名称や新語や造語が現れるのである。「穿袖」はその一例である。

さて、なぜ翻訳者にとって、漢字の読み方はそんなにも重要なのであろうか。実際は服装だからなのである。それは、単語が服飾用語=専門用語または固有の名詞などであるという理由からなのである。(『絵引』という)

翻訳対象が服飾のみならず、仏教・動植物等さまざまな専門用語や固有の名詞で構成されており、それを正確に仏語で訳し、かつ、日本語での読み方を付記しなくてはならないからである。

この翻訳に着手する前に、我々は共通の翻訳のポリシー(Charter)を決める必要性を強く感じた。原文の説明を加える脚注を掲載してはならないという前提がある以上、原文が今の基準によると十分に科学的であるとは言いがたくとも、その翻訳はできるだけ科学的なものではないからである。

私たちのポリシーのいくつかの例を挙げたい。

例えば、

- (1) 服装の名称の場合、単語のローマ字表示、そしてその省略された定義(小定義)を載せる。
- (2) ある単語が二回出てきて、同じものを示す場合、その翻訳は同じであることである。つまり、ある単語の翻訳は途中で変わってはならない。
- (3) また、二つの単語の意味が非常に近いものであっても、違う仏語に訳する。
- (4) 明確さを目指しているのだから、たとえば、植物の名称がフランス語にない場合、そのラテン語の学名に、また、仏教関連の名称の場合は、日本語から梵語にというように、それぞれ変換して記載する。
- (5) さらに、仏語訳に特有の原則も決定した。例えば、章のタイトルでは、定冠詞を使うが、キャプションでは不定詞(つまり辞書形)の前「action de ~」(動作)をつき加える、などである。

そのような科学的な一貫性を必要としているのはフランス語圏の読者が特別だからだ。なぜこのようなプロセスが必要なのかと言うと、そのような科学的な一貫性を重視する、フランス語圏の読者の特殊性が背景にあるからだと思う。

二. フランス語圏における『絵引』の仏語訳

私たちがポリシーの必要性を感じた理由は、『絵引』の仏語訳の読者が一体誰であるのか、それを自問した結果なのである。

英語訳が対象としている読者が誰であるのかは分からないが、仏語訳の可能的な読者(仏語訳を読むであろう人)は、きっとフランス語圏(つまりフランスだけでは

ない)の一般の人というよりも、学者の世界の人なのである。『絵引』を買う可能性が高いのは、まず大学の研究所だと思われる。ご存知の通り、フランス語圏における「郷土研究」のレベルは依然として高く、他の国々に比べて、その研究範囲に関する小論文は定期的には出版されている。しかしながら、日本の庶民の生活史に関する研究論文は少なく、使われている資料は主に筆記資料である。絵を歴史資料として使うのはまだ稀で、始まったばかりである。現在、私たちの作業を手伝ってくださっている校閲者のCharlotte von VERSCHUER教授やJean-Michel BUTTEL准教授は、フランスでそのような非文字資料を使って授業や研究をしていらっしゃる方である。

要するに、「郷土研究」や「民族学」「民俗学」研究レポートで一番使われている言語は英語、そしてフランス語なので、英語訳のほかに仏語訳があれば、『絵引』は世界中で広く知られるのではないかと思う。

そう仮定すると、その読者の期待している翻訳のレベルは高く、近似を許せないものである。したがって、専門用語を使用しなければいけない場合は多い。例えば、建築用語の場合、「板」を「planche」と直訳するより、その板が縦板か横板かなどを区別して、ふさわしい専門用語で翻訳しなければならないと思う。そうすると、「板屋根」を直訳の「toit de planche」より、専門用語の「toit de bardeaux」と翻訳したほうが正確なのである。

もちろん、このような翻訳は、本来、専門家15人ぐらいのチームがフルタイムで行う仕事なので、伝統建築や平安時代の服装の専門家ではない二人のパートタイム翻訳者で完璧にできる任務ではないと言えるが、高い質を要求しながら翻訳しようと、日々真摯に取り組んでいる。

結論

『絵引』の仏語訳は、二人だけで短期間に仕上げなくてはならないという無謀とも思える厳しい任務であるが、きっと科学的な効果のある計画となると強く信じている。



絵引を探る —世界のEBIKI、あるいは Pictopediaへ向けて—

君 康道

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の一つとして進められたマルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂刊行プロジェクトにおいて、私も英訳部分の編纂作業に関わらせて頂いてきた。その作業は歴史や民俗を専攻する英語に堪能な大学院生、あるいは英語を母語とする大学院留学生が翻訳を担当し、そこで訳された原稿を我々プロジェクトメンバーが校閲するという方法で進められたが、この方法は決して効率がいいとは言えず、我々プロジェクトメンバーも英語のネイティブは一人のみ、ましてや全員が『絵引』について精通しているわけでもなかったため、校閲はまさしく『絵引』を「探り」ながら一字一句対比検討する、という作業の繰り返しであった。そのため全 5 巻中第 1 巻及び第 2 巻の刊行で 5 年の期間を終えることになってしまったが、このような非効率的な手段を選んだことには大きな理由があった。それは① COE 事業推進目的の一つである「若手研究者の育成」のためであり、そしてもうひとつは②『絵引』は日本常民文化研究所が創設者・澁澤敬三から受け継ぐ貴重な「財産」であるため、なるべく愛情を持った関係者の手で作業を行いたい、ということからであった。その中でも特に②の「貴重な財産」という点には大きな注意が払われたところであり、『絵引』の価値を損なわないようにするため、一連の作業を進めるにあたり更に以下のような原則が設けられた。

- I 出来るだけ原文に即して忠実に翻訳する。
- II 絵引の絵を基本としながら、そこに描かれたものに適切な訳語を与える。
- III 極力日本語をそのまま残さないよう、原文を適切な訳語に置き換える。

我々の目的は決して『絵引』の改訂版を編纂することではなく、あくまでその「マルチ言語版」を編纂することであり、上記の原則は当たり前といえば当たり前のことである。しかし実際にはこの原則に沿うが故、対処に頭を悩ませた問題は数知れなかった。解説文の内容が現代にそぐわず、そのまま訳したのでは読者に誤解を与え

てしまいかねない記述はどうか、あるモノの訳語として必ずしもイコールではない語彙をそのまま充てて良いかどうか、更には全く適当な訳語がないモノをどう訳すか等々、問題にぶつかる度に我々は検討を重ねてひとつひとつ対処していった。

このように『絵引』を「探り」つつ校閲作業を進める中、『絵引』にはそれ自体における記述の「間違い」も多く含まれていることも判明した。これは『絵引』編纂・校閲時に絵巻の絵及び内容を再確認しなかったがために生じた問題だと思われるが、そうした間違いを修正するか否かについても、我々は大いに頭を悩ませた。記述内容に誤りがあれば正しく修正されるのが、学術資料としては当然の筋であろう。しかし万が一修正によって内容が変わり、その結果本来の『絵引』とは内容の異なる別物のマルチ言語版『絵引』が出来上がってしまったとしたら、それは我々の目的と大いに反することになる。先にも述べたとおり我々の目的は「貴重な財産」たる『絵引』のマルチ言語版を編纂することであり、我々自身の解釈による新たな『絵引』を編纂することではない。更に加えて、マルチ言語版『絵引』はその名の通り英語の他、キャプションは中国語及び韓国語にも訳されることになっており、その作業もほぼ同時進行で進められていたため、英訳部分で記述内容はともかくキャプションを修正するということは、他の言語の翻訳作業にも影響を及ぼすということになる。そうした箇所が増えていけば作業に混乱を来す事は想像に難しくなく、その結果マルチ言語版『絵引』が一巻も世に出ることなく COE プログラムが終了してしまうことも現実を考えられうることであった。こうした最悪の事態を回避する必要からも、マルチ言語版『絵引』の編纂においては結局のところ「間違い」にはそのまま目を瞑り、「原則」に従って「間違い」も「間違い」のまま原文に沿った訳が施されることになった。但し「間違い」と言ってもそれは敢えて意図的に残された「間違い」であるため、マルチ言語版『絵引』では各巻の凡例及び一巻巻頭の序文においてその旨の断りを付けて読者・利用者に注意を促している。

マルチ言語版『絵引』では「絵引」を「Pictopedia」と表しているが、これはもちろん既存の語彙ではなく、「Picture」と「Encyclopedia」を合わせた我々の造語である。マルチ言語版『絵引』編纂の目的は、その内容の紹介もさることながら「絵引」という手法そのものを広く世界に紹介することにもあり、敢えて全く馴染みのない「Pictopedia」という言葉を充てたことには、新

たなものを世に問うという意気込みもそこには多分に含まれている。これはもしかすると澁澤が「絵引」という言葉を生み出したときの思いに通じるものがあるかもしれない。そうした意気込みに対する評価や意見が徐々にこれから聞こえて来ると思われるが、その中には我々が思いもしなかったような見方や解釈、散々頭を悩ませた問題に関する明快な解決案、更には全く気付かなかった新たな発見などというものも出て来よう。それらはマルチ言語版『絵引』=『Pictopedia』だけでなく元の『絵引』にもフィードバックし得るものもあるはずであり、そうしたフィードバックを生かして、今後は今まで殆どなされてこなかった『絵引』そのものの研究というものも生まれてくる可能性も出てくるのではないだろうか。更にそれはまた、我々が目を瞑らざるを得なかった「間違い」を可能な限り正した、改訂版『絵引』の実現にも繋がるかもしれない。澁澤敬三から受け継がれる「絵引」が、「EBIKI」あるいは「Pictopedia」として世界に広く紹介されることは、世界の人文研究の発展に寄与することもさることながら、このように本来の「日本文化研究」そのものの発展にも非常に大きな意味があるように思われるのである。

現在非文字資料研究センターにて鋭意進行中である残り三巻のマルチ言語版『絵引』編纂プロジェクトに、私自身今後も微力ながら協力させて頂きたいと考えている。

以上の三つの報告について、韓東洙教授と福田教授よりコメントが寄せられた。韓氏は韓国における非文字研

究の在り方に触れながら、東アジア三国の民俗学研究にとっての「絵引」の重要性、高い応用性を指摘した。翻訳の難しさがあるものの、誤りを恐れるより、その成果を期待し、さらなる動力の必要を強



福田アジオ氏

調した。福田氏はCOEの経緯を振り返って、『絵巻物による日本常民生活絵引』の資料としてのユニークさを語った。翻訳作業を通して海外の専門家だけでなく、一般の読者にとっても、日本文化の面白さを確認し、世界の国々のそれぞれの文化との共通性が分かるきっかけとなれば、との抱負を述べた。



右：韓東洙氏 左：徐東千氏（通訳）

『絵引』の翻訳作業はある意味ではまだ未知なものである。今回の公開研究会によって、私を含め、すべての関係者にとって、今までの仕事を総点検し、完訳へ向かっての励みになることであろう。



質疑・討論